

一人ひとり、みんなが主役

「つながりあって、自分のために、(前に前に)生きよう」

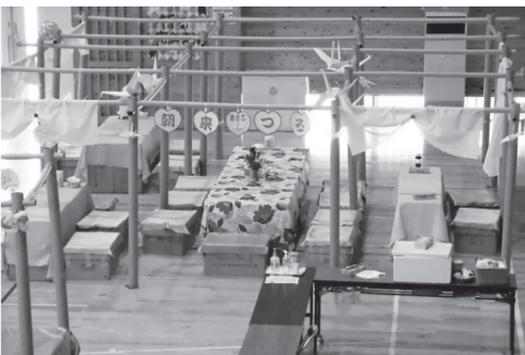
平成28年4月に発生した熊本地震で最大震度7を二度観測した益城町。避難所の一つとなった益城中央小学校体育館では、ある避難女性の呼びかけによって生活環境が改善され、避難者による完全自主運営に移行しました。全国から注目されたその取組のまとめ役となった吉村静代さんにお話を伺いました。



益城だいすきプロジェクト
代表 吉村 静代 さん

益城だいすきプロジェクト代表。熊本県出身。平成4年に地域づくりのボランティア団体「益城まちづくり塾」を立ち上げ取り組む。阪神淡路大震災をきっかけに地域づくりに防災が必要と考え、防災ボランティア養成講座を1年間行い、防災ボランティア益城を立ち上げる。平成28年熊本地震により自宅が全壊、益城中央小学校避難所に身を寄せた。避難所の完全自主運営の立役者。

▼ワークショップで自主運営の避難所について説明する吉村さん



▲益城中央小学校避難所につくられた共有スペース

同じ「避難者」だから「その呼びかけ

4月16日に自宅近くの益城中央小学校へ避難しました。小学校にはたくさんの方が避難し、17日には避難者は400人を超えました。足の踏み場もなく、非常時には危険を伴うような状況でした。そこでまずは非常口を確認し、避難通路をつくるなど避難所の区画整理を行いました。元々防災ボランティアグループの主宰やまちづくりの取組などを行っていたため、声を上げて行動することとまどいは感じませんでした。

益城中央小学校は他と比べ指定避難所に指定されるのが遅く、各地から避難所に入れなかった人達が集まり、お互い知らない人同士という状況でした。しかし「自分も避難者です。ご協力ください」と呼びかけることで、みなさんが協力してくれ、避難所に居住区画をつくることができました。

次に、出かける時に布団をたたむこと、身の周りの掃除をしてもらうことを呼びかけました。そうじ道具を共有とし、それを隣に渡していくことで、声

大きな家族のような場所に

震災から1ヶ月後に段ボールベッドが入りました。カーテンで仕切りもできましたが、なるべく昼間はカーテンを開けるよう呼びかけ、開放感のある避難所をめざしました。キッズサロンやコミュニティカフェといった共有スペースもつくり、避難者が孤立しないことを第一に考えました。大人はカフェでつらい思いを語り合い、不安で泣いたり奇声を上げていた子ども達は大人の手伝いをするうちに、みんながどんどん元気になっていきました。出かける時は「いつでもきます」「いつでもしゃい」「帰った時は「ただいま」おかえりなさい」。まるで大きな家族のような避難所になりました。

自主運営の中で、役割分担は一切しませんでした。しかしトラブルは目に見えませんでした。避難者の立場はそれぞれです。働いている人、子育てしている人、若い人、高齢の人。いろいろな人がいる中で、役割を決めると負担になる可能性があります。そこで、できる人ができることを、やりたい人が得意なことをするようにしました。年齢や性別、障がいの有無にかかわらず、誰もが自分で考え、やれることをみつけていました。

避難所から仮設へ、絆をつないで

震災から半年。益城中央小学校に避難していた人達は大きく二つの仮設団地へ移りました。東日本大

をかけ合うきっかけができ、お互いの顔が見えてくるようになりました。そして徐々に「コミュニティ」ができていきました。

当たり前前の生活を「する」

益城中央小学校避難所は、福岡や関西から派遣された自治体職員が運営していました。職員の方がトイレ掃除までしてくれている姿をみんなに伝えることで、今度は避難者自身が掃除をするようになりました。また、支援してくれるのが当たり前と思わず、「ありがとう」と感謝の声をかけることで、支援者と避難者が仲良くなりました。震災前は当たり前で自分で行っていたことが、避難者になったとたん、上げ膳、据え膳になってしまい、「なんでもしてくれろ」という環境に慣れてしまいます。すると避難所を出た時になかなか自立できなくなると思われたため、「自分の事は自分で」と、避難所の自主運営について考えるようになりました。

震災の時に避難所から仮設住宅に移り、閉鎖的な環境で孤独死された人のことが頭にあったため、行政へ相談し、中央小の避難者を仮設団地で隣同士や同じエリアにしようという配慮をしてもらいました。

避難所のコミュニティを仮設団地に繋ぎ、次はそのコミュニティを復興住宅へ繋げたい。10年、20年先を見据えたまちづくりが必要になってきます。自分の町だから、自分のために、若い人達が中心となって行動を起こしていつかほしいと願っています。

生きたいように生きる

「人のために」と考えても長続きはしません。自分がどう生きたいか、どんな町に住みたいかを考えて行動するのが一番のエネルギーです。そうすることで、どんなことがあっても思いつきり行動することができます。「出る杭は打たれる」しかし「打たれすぎた杭はぬげにくい」。自分が楽しいと思うことだからこそ、何があってもぶれることなく、自分が生きたいように生きていきます。

そうすると、一緒に動いてくれる人、応援してくれる人が必ず現れ、優しいつながりが広がっていきます。楽しく、前に前に進みましょう。